

トランジション：移住，教育，就労を通しての考察

浅羽 エリック

カロリンスカ研究所，スウェーデン

本論文の目的は，異なる文脈や視点で行われた3つの研究と作業科学の文献を引用しながら，トランジションについて批判的に探求することである。第一に，高齢者における海外移住と場所作り(placemaking)の研究を紹介する。二つ目は，作業療法の学部生が，作業を学ぶことに関する研究である。最後は，中途障害者の職場復帰の研究についてである。これらの研究をトランジション理論の概念を用いて探る。トランジションとは，視点を変えるような知識を獲得し，人々がプロフェッショナルアイデンティティを身につけ，“成っていく”さまと言えるかもしれない。トランジションはまた，期待がかなわなかった経験に端を発するアイデンティティの剥奪や破壊とも言える。さらなる考察は本講演で議論される。

作業科学研究, 10, 24-40, 2016.

はじめに

本論文では，口頭で述べたことを書面にすることでより明確にするという意図のもとに修正を加えている。しかし内容そのものは，2015年に浜松で開かれた日本作業科学研究会(JSSO)第19回セミナーの佐藤剛記念講演で話したものと一致している。読者の方々が，私を信頼し，ここに提示する考えを共有して下さることを光栄に思っていることを再度お伝えしたい。私はまた，過去12年間に行われてきた記念講演の伝統に連なること，そしてその文脈の中で現れたアイデアの発展の一部になることを謙虚に受け止め，また，誇りに思う。

作業科学を背景としてトランジションの概念を理論的・実践的に扱ってきた学者は少なくない(Blair, 2000; Crider, Calder, Bunting, & Forwell, 2015; Heuchemer & Josephsson, 2006; Hon, Sun, Suto, & Forwell, 2011; Jonsson, Josephsson, & Kielhofner, 2001)。最近では，Criderら(2015)が作業の視点から特別な興味をもってトランジションに焦点をあてた文献レビューを行っている。彼らの結論から一つ言えることは，トランジションの理論を発展する出発点として使える作業の視点の研究基盤が十分に

あるということである。Criderらは，この領域における研究の将来に対し，方法論的発展，環境や倫理/文化的多様性との関係に焦点をあてた研究，そして概念的な発展などを例とする幾つかの示唆を読者に残している。次の紙面では私は，トランジションについて探求することを目的に，三つの例を紹介する。

出発のポイント - 移住

移住とは，人がある場所からもう一つの場所へと動くことと定義づけられている。人々はかつてないほど旅行する。人々はまた，ある部分では，自国を出て/他国に入る自分自身の経験として，別の部分では，人が出入りするという近隣の変化を見ることとして，かつてないほど移住を経験している。この傾向と並走して，特定の場所でも世界的にも，高齢化と移住とを経験している人が増えている。場所への出入りというこのような多様なトランジションにあたっては，継続的な意味の付与や，日常的に親しみのある場所と見知らぬ場所を再結合することが必要になる(Farias and Asaba, 2013; Johansson et al., 2012; Phillipsson, 2007)。

移住傾向の増加と並行し、高齢者ができるだけ長く自宅で生活することを支援する動きもある。高齢者の地域居住 (aging in place) は、理想的な政策であるとして展開されており、人が高齢になってもできるだけ長く自宅や近隣にいて生活を支援することを目標としている (Wiles, 2012)。誤解のないように言うと、移住の傾向と高齢者の地域居住の考えは、私の知る限り、明白なつながりがあったわけではない。高齢者を自宅で継続的に支援することを強調する背景には、おそらく労働状況の変化の結果があるであろう。数十年前、高齢者はかなりの部分において家族からの世話を受けていたが、ここ数十年は介護施設が発達し、自分の家から介護施設に移ることが普通になってきた。介護施設は、特殊な看護とリハビリテーションサービスを一カ所で提供する必要性から発達した。高齢における地域在住の理想は、様々な意味で肯定的なものであるだろうが、他国で年をとっていく移住者にとって高齢者の地域居住はどのような意味を持つものなのだろう。家から介護施設に移るにせよ、ある国から別の国に移るにせよ、引っ越しは、様々な意味でトランジションを含む。

文化人類学者で作家のある人の言葉を引用してみよう。「私は旅行が好きだ。しかし同時に私は旅行することにひどく怯える。次の旅に乗り出すとき、私はいろいろな願掛けの儀式を注意深く行う…」 (Behar, 2013, p. 3)。この文は、「トラベリングヘビー：旅の回想」という本からの抜粋だが、これを使うには二つの理由がある。一つは、Behar が見出した何かはトランジションを考える時に適切だと考えるからである。トランジションに本質的に含まれる変化の要素は、愛と恐れが混じりあった感覚に違いないが…Behar はそれと同じように自分の移住経験を、興奮 (愛) と恐れ (怯え) の両方をもつ旅であると形容している。Behar の言葉から始めたもう一つの理由は、移住そのものにある。私見ではあるが、Behar は、読者が移住についてその意味の全ての層から考えさせるようと試みる優れた作家である。私は移住の経験について作業の視点から理解することに興味をもっており、研究の一環として、移住した人 (自国から出た人、他国に入った人) に関わってきた。仮に今ここで、移住経験はトランジションを含むとするならば、それは広い意味において、変化を含んでいる。少なく見積もっても、それは、一つの場所からもう一つの場所に移り住むことである。別の言い方をすれば、家と呼ぶ場所から去り、再構築するものである。

home や場所のような概念は、移住の文脈において妥当なものとなっている。日常会話的に言うと、home はし

ばしば人が帰る場所に関連している。しかし、移住経験を念頭に置くと、home の感覚は静的な感覚は少なく、むしろ、柔軟で、流れ込むものというような理解の方がしっくりするかもしれない。Jackson(1995) は、home とは私たちが住むところなのか、それとも、私たちの想像 (或いは Jackson が言う夢) の場所なのか、という疑問を投げかけている。ここで私が興味深く感じ、同時に現状にも即していると思うことは、home と呼ぶ時の連続性と物理的な場所の必要性への問いである。Jackson (1995) は、次のように記す。

「長い目でみると、厳密に連続性を強調するようなポイントはない。信じることの移行を言葉にすることは避けた方が良いし、機能しないアイデンティティは忘れた方が良い。あなたの出身地とあなたが home を作る場所との間にギャップがあるならば、それは問題として取り上げない方が良い」 (p.35)。

この記述は、国際的な移住や老年学的高齢者の地域居住の視点から興味深いものがある。なぜならば、高齢者の地域居住に対し、連続性と物理的場所は考慮されるべき妥当なニーズなのかということに問う批判的考えが内に含まれているからである。この意味で、私は、移住高齢者の経験に関して高齢者の地域居住の概念の妥当性を問いかけている。老年学では高齢者の地域居住の概念は、しばしば、社会が何をすべきかということに伴うものであり、この含みの中で、home とは何か肯定的なものである。

しかし、この感傷的考えは、たとえ家が心地よさに満たされる場所になり得るとしても、同時に、単なる協和の空間ではなく、緊張や恐怖にもなり得る空間であることから、問題を持つものとして取り組まれてきた。国際的移住では、場所、作業、アイデンティティの再交渉が、自国の移住に比べはるかに複雑に繰り返される。なぜならば、そこでは多くの場合、異なる生活習慣や言葉、年をとることに関する考え方や社会における高齢者の役割の違い、福祉や社会的資源の使い方や移行する人間関係、そして、混淆または移行するアイデンティティの新しい形への対応を含んでいるからである (Bozic, 2006; Jackson, 2013; Lewis, 2009; Patterson, 2006)。

作業科学への妥当性

移住について探ることは、世界的な文脈において、人が日常作業を通じて世界中の異なる場所と、関わりつながる方法を理解することであり、作業科学に関連するもの

である。作業科学の文献は、例えば、高齢者の地域居住ではなく場所作りとして考える (Johansson et al) ように、場所の流動的概念を移住の研究に取り込んでいく必要性を支持している。Ruth Zemke (2004) もこれについて「作業的 - 空間性」(p. 612) の論点から言及したかもしれない。トランジションは、多分、高齢者の地域居住というよりは、場所作りの分野の概念に、はるかに自然に結びつくようにみえる。この考えの妥当性は、高齢者の地域居住に吹き込まれている場所の連続性の考え方が、移住を経験した人が用いる言葉と単純には調和しないことから現れている (Henning, Ahnby, & Osterstrom, 2009; Hwang, Cummings, Sixsmith, & Sixsmith, 2011; Wiles, Leibing, Guberman, Reeve, & Allen, 2012) (Cristoforetti, Gennai, & Rodeschini, 2011; Cutchin, Dickie, & Humphrey, 2006)。

作業を通じ作業を学ぶ

次の例は、作業を通じ、作業を学ぶ事である。ここでは、カロリンスカ研究所の作業療法の学部生教育プログラムを例にあげる。このカリキュラムの中に「作業科学と作業療法の基礎」という科目がある。この科目は、私が他の教員と一緒に、4年以上の期間を通して作り上げてきたものである。この例の中心を成す問いは、「学生はどのように作業のエキスパートになるのか、学生をどのように作業について『知らない』から『知っている』状態へとトランジションさせていくのか?」というものである。

私は、これらの問いは、作業科学や作業療法プログラムの学術・臨床教員が議論しなければならないものであるという意見を持っている。私たちが出発点において、なぜこれが重要であるかということを確認に理解しているならば、これらの疑問をどのように解いていくかという議論は最大限の可能性をもつことになる。作業の構造と仕組みについて理解することが、日常生活の可能性を開く鍵となる (Asaba & Wicks, 2010)。私たちは、学生が私たちのプログラムを終えるときに、作業とは何かについて十分に理解していることを保証する必要がある – それは同時に、作業療法士または作業科学者であること、または、作業療法士かつ作業科学者であることへの専門職アイデンティティへのトランジションを促進することでもある。この例におけるトランジションは、知識の獲得とその応用から生じる。言い換えれば、作業についてより知識を持ち、作業に関して生まれる知識を熟考することができ、様々な文脈で知識を適用することができるということである。私は、これは作業について学び続けることや、臨床・研究・リーダーシップの点で作業を使用するために重要であると考え。

学ぶという文脈において、作業は様々な視点から探求されてきた (Sutton & Griffin, 2000)。しかし、教育の領域では、作業の概念を使って作業を学ぶことはほとんど行われていない。この教育的プロジェクトの目的は、作業を通して作業を学ぶという作業を基盤とした学習活動を開発すること、作業を通して作業を学ぶ事に対する学生の経験を探求することであった。このプロジェクトには、作業科学や教育学からの価値観や概念に基づいて科目を構築するという明確な意図があった。

ここで学習とはどのようなものかを考えてみたい。伝統的には、そして今日の複数の大学では、学習の文脈は、教室の前方にいる先生と、先生が立つ前方から離れて徐々に数を増して座っている生徒という形で描かれる。時間的な例をみると、第1週は数多くの学生がいる絵図から、次第にクラスに来ることを優先する学生が少なくなる絵図へと変化する。この図では、学生が、教室における自分の存在や参加が、自分の学習に貢献していることを見出せないという文脈を表している。これに試験の状況を加えたらどうなるだろう。伝統的な講義の文脈では、多くの場合、学生はある決まった問いに答えられることを示さなければならないような、座って書く試験で終了する。誤解のないように言えば、伝統的な学習文脈と呼ばれるものが常に効果的でないと言っているわけではない。私が言いたいのは、この種の方法は、作業を学ぶのには最適ではないかもしれないということであり、また、経験的学習方法を使うものでもないということである。私たちの計画したコースは、反転授業、オンライン学習、仲間からのフィードバック、アクティブラーニングのような考えを基盤にし、学生が、作業を経験し、作業が何かという考えが生じるような情報を探し、循環的に知識を深めていくために他者と考えを共有する必要がある積極的な過程としての学びを可能にする。

学習活動

学習活動は、次のように作成された。学生は、今までやったことがないか、少なくとも何年もやっていない作業で、してみたいと思う作業を選択するという課題を与えられる。作業は、授業期間の間は、一週間のうち少なくとも2回実施できるものを選ぶ必要がある。学生は、1グループ8人からなるプロジェクトグループに割り振られる。ここでプロジェクトグループとは、考えや、授業課題、読み課題について話し合えるような小グループとしての役割を担っている。プロジェクトグループは、閉鎖的ブログにアクセスでき、コミュニケーションを取る。授業の第1週目、

学生は作業を選択し、作業の活動分析を行い、なぜ自分がその作業を選んだか、何を期待するかをブログに書いた。次の数週間、学生は一週間に一度ブログをつけた。それぞれのブログには、a) 作業に関わるその週の振り返りと b) その週に読んだ読み物の振り返りを自身の作業に関連付けて行い、また、各学生は、別の学生のブログにフィードバックを提供した。読み課題は、人間作業モデル、「作業科学」ジャーナルやその他の雑誌からの選出した論文などが含まれていた。毎週、話題提供の講義、スパービジョン面接、そして、読み物への洞察を得る・経験のある教員と討論するなどのための教員とのセミナーが行われた。

最後に、自分の経験を共有する現実の聞き手がいるという感覚をもつために、また、他の学生グループとの橋渡しのために、内見会が計画された。内見会は、学生が、他学科や他学年、キャンパス内の教員やスタッフを招待する場でもあった。内見会の準備にあたっては、参加者に自分が科目履修中に従事した作業の結果を見てもらったり、その作業を試してもらったりできるようなイベントにするため、学生は、内見会のテーマを選び、招待状を作り、視覚的でストーリー性のあるテクニックを使った。

方法

開発した新しい科目を評価するために 3 つの側面が選ばれた。我々はまず、学生にインタビューし、学生の経験について聞く事が妥当だと考えた。二つ目は、もともとあった科目に対し、新しい科目にかかる費用を見ることである。三つ目として、新しい科目ももとの科目との間の学生の成績の違いをみたいと考えた。

結果

学生の経験

学生の経験を評価するために、3 つのフォーカスグループが実施された。フォーカスグループは 3 つの学期にまたがって行われ、合計12名の異なる学生が参加した。そこから、1) 期待していたよりずっとたくさん、2) 他の方法で考え始めた、3) 自分で何かをし始める、4) フィードバックをうけることがとても良いという 4 つのテーマが見出された。

最初のテーマは、新しい作業を行うことへ実際の挑戦から得た気づきに基づいていた。学生は、ジョギング、ヨガ、楽器の演奏、料理、サイクリングなどというような作業を選んだ。当初学生は、時間を見つけ出すこと以外はそれほど難しいことはないと考えていた。しかし、一旦、作

業を行い始めると、時間を見つけること以外にも難しいことがあることにしばしば気づいた。ある学生は、この点について次のようにうまくまとめている。

「ええと、作業についてより洞察を深めることができ、全く新しい作業に従事するという事は、思った以上に大変なことがたくさんあるってことも分かるようになる。いつもそんなに簡単にいくわけではないということ。」

学生はまた、作業の実施を理論的な読み課題に統合することが、学習に貢献することに賛同している。学生はさらに、実際に自分自身で経験しなければ、経験したのと同じレベルまで、作業についての理解を得ることは難しいだろうと感じていた。

二つ目のテーマは、別の見方で考えるということである。学生は、ルーティンを変えるという経験は、ルーティンの良い点と悪い点への気づきを高めることだったと感じていた。学生はさらに、自己分析をした結果、同時に友人や家族を作業バランスや作業のレポーターという視点で分析を始めたと感じていた。

三つ目のテーマは、ある意味で二つ目のものに関連しているが、新しい作業に積極的に従事する必要性によって、一連の問題解決に従事したという感覚から来たと思われる。学生はこれを、思ったより大変なことだったと感じたにもかかわらず肯定的に受け止めていた。

最後の 4 番目のテーマは、フィードバックの経験である。学生は、ブログを使うのは難しく、複数の技術的困難があったと感じていたが、ブログから得られる毎週のフィードバックは、この科目において貴重な存在だったと見ていた。

費用と成績

科目を作り直すとき、しばしば指摘される点は、費用がかかりすぎる、または代わりとなるものに十分な資金を受けられないということがある。このため、私たちは教員の時間ベースの科目の費用に注目した。この方法には様々なやり方があるだろうが、ここでは、クラスにいる時間に、準備に使われる時間を掛けあわせるというモデルを使った(表 1)

表 1.

科目活動	時間	準備時間(因数)
講義	1	3-5
セミナー	1	1-2
ワークショップ	1	1
試験	1	1

以下に示すものが、このモデルの例である。ここでは準備時間が因数となる。もし、ある教員が毎学期 3 時間の講義をするならば、3 (講義) × 3 (因数) となり、9 時間の時間費用がかかる。この 3 時間の間には、15 分間の休憩が含まれる。教員が新採用であれば、しばしば因数が加算され 3 (講義) × 5 (因数) となり 15 時間となる。講義を多くもてば、試験も多くなり、教員が成績をつける時間も 40-50 時間となる。教育理念を変えれば、講義時間を減らし、他の学習形態が優先されるようになる。例えば、1 時間のセミナーは、1 (セミナー) × 2 (因数) となり、2 時間である。この方法をとると、私たちは学生と教員が考えや読み課題を論じあえる 4 つの小セミナーグループを持つことができ、それでも、3 時間の講義に比べ、予算的には 1 時間少なくて済む。

表 2 に記すように、教員が率いる形の科目時間の数は、大きく減じた。これは、学生に接している時間は 3 時間の講義に比べ 1 時間長いが、成果はより効果的で、セミナーを通して積極的に参加することで学生はより長く情報を覚え、かつ、より科目内容に満足するという肯定的なものとして捉えることができる。このような変化は、最終成績では捉えることはできないものである。

表 2.

年度	学生数	時間あたり費用 (平均)	成績 (学生数)		
			優	合格	不合格
2010/2011	86	530	-	75	11
2012/2013	82	428	26	52	4
2014/2015	89	410	31	50	8

作業科学への妥当性

まとめると、作業に焦点があたり作業経験を基盤とするような作業療法や作業科学の早期教育カリキュラムで行う学習活動における積極的参加は、学生が実際に試すことができる生きた概念的枠組みを提供するものであり、作業の理解をより深いものとすることができると考える。これは、重要なことであり、トランジションという言葉にも値する。つまり、作業療法士 / 科学者への専門職アイデンティティへとトランジションが起こるということは、この領域の核の完全な理解に基づくものであるからである。この事例から得られた結果は完璧とは言い難いが、カリキュラムの早期における経験にもとづくこのような作業の学習は、作業療法士の専門職のアイデンティティへの早期のトランジションに役に立つものであることを示唆していると考えられる。さらに言うなら

ば、より多くの異なる種類の学習活動をすることは、究極には、より多くの時間を必要とするわけではないことも示している。最後に、フィードバックは、学生が作業についてフィードバックを得る場所というだけでなく、作業療法士が治療的状况で会う人々にとっても重要であった。この点には、教育者がさらに論議を進め、修正していくべきことが含まれていると信じる。

脊髄損傷の後に仕事に戻る (RTW)

最後に示すのは、障害を持ったのちに仕事にもどるといって現在進行中の研究に基づくものである。私は現在、研究者や博士課程の学生たちとともに、何らかの形で職業リハビリテーション、または、仕事への復帰に関連するようなプロジェクトを行っているが、ここで示す内容はこのプロジェクトから引き出している。

ちょっとした話に耳を傾けてほしい。今日若者が仕事につくとき、その人はたぶん、一生において、何度か仕事を変えるだろう。今、卒業する人たちは、10 年後に今はまだ存在しないような仕事についている可能性がある。これは、仕事につく若者は、仕事という意味において大きなトランジションを経験する可能性があるということであり、そのトランジションの幾つかは、今はまだ名前さえついていないような未来を含んでいるかもしれないのである。一歩引いて、仕事に含まれているものについて考えてみよう。簡単に言うと、「仕事」とは作業の種類の一つであり、それゆえ作業科学にとって妥当なものであると考える。さらに、作業の視点から見ると、仕事は単なる雇用以上のものがある。これは、仕事は単なる雇用だけではないという国際労働組織のような他組織の定義と一致している。彼らは次のように記す。

私たちは毎日、仕事は、全ての人にとって人の存在のあり方を表すものであることに気づかされる。それは、生活を維持し、最低限のニーズをみたす手段である。しかし、それはまた、個人がそれを通し、自分自身に対し、そしてその人を取り巻く人に対し、その人自身のアイデンティティを確かめる活動でもある。それは個人の選択として、家族の福祉のために、そして社会の安定のためになくてはならないものである (ILO, 2001, p. 1.2).

さらに、作業的な視点を持ち込んだ臨床実践でも、仕事は作業科学に妥当な話題である。世界作業療法連盟 (WFOT) は、職業リハビリテーションに関する声明書に

において次のように主張している。

この声明文で、職業リハビリテーションとは、人が仕事につく、再び仕事を始める、復職する、仕事に残るということを支援する様々なサービスの提供を意味する広いものである。職業リハビリテーションは、様々な程度や形態において、人の仕事歴の有無に関わらず公・私の分野や非政府組織によって、様々な専門職・非専門職の領域において雇用者と被雇用者のために、世界中で行われている (WFOT, 2012, p. 1)。

この研究の枠組みをまとめると、ここで指摘するのは、仕事とは作業の一つの種類あり、雇用以上のものを含むということである。しかし、報酬がほとんどの成人にとって重要な側面であることや、仕事がかえり以上できなかつたり、人が仕事に戻る必要があるというプロセスについて理解することは非常に重要なことである。

スウェーデンでは、脊髄損傷のある人は相対的に少ないが、仕事に戻ること (return to work: RTW) を支援する目的の職業リハビリテーション実践の改革に大きな利益を得る人々である。新しく SCI になった人の約 50% が、受傷後に仕事をしていないという報告が出されている (Valtonen, Karlsson, Alaranta, & Viikari-Juntura, 2006)。仕事に就くことは、仕事をする年齢のほとんどの人にとって個人の重要な目標であり、それは、リハビリテーション初期のプロセスにいる脊髄損傷をもつ若い年齢の人にとっても同じであることが研究で示されている (Bergmark, Westgren, & Asaba, 2011)。RTW の概念は、広く復職という意味で捉えることができるが、新しい職場で働き始めたり、職場で異なる役割を取るという意味も含まれている (Wasiak et al., 2007, p. 767)。脊損の人々には、国のガイドラインがなく、また RTW を支援するための資源を整理するような知識がないことなどから、仕事にもどることは非常に重要なことである。社会保険局のような行政部門は、仕事に戻ることに限っては、包括的な視点を持つことが重要であることを強調し、受傷、疾患、疾病後に支援を必要とする人に対する職業的リハビリテーションをより効果的にするためには、様々な利害関係を持つ人々が一層共同するよう呼びかけている。

私は、RTW プロジェクトで二つの種類のデータを扱っている。一つは SCI をもつ成人に対する個人インタビューを基にしたものである。これらのインタビューは、受傷後 1-5 年を経た 8 人の成人に対して行った。また、個々の

グループメンバーには、6 年後に追跡調査として、参与観察を含むインタビューを行った。データは全て、私の博士課程にいる Lisa Bergmark が収集した。もう一つのデータは、SCI をもつ 6 名によるフォトボイスグループセッションを通して集めた。この 6 名は、前述の 2 つの研究で個人インタビューを行った人々とは異なる。Lisa と私は、8 回のフォトボイスグループを開き、さらに展示会を計画する参照グループとして 3 回の追加セッションを行った (Holmlund & Asaba, 未発表原稿)。

私たちの研究の結果は総合的に、仕事に対する期待、実際に起こったことに注目すること、うまくいった状況を探ること、に関する経験を示していた。この結果はたぶん、日常生活上で継続的に起こる優先順位の調整、教育を RTW 過程へと統合する必要性、仕事に関連する希望と失望の間を揺れ動く経験の中にある不確かさの程度、そしてまた、場合によっては、意味のある「仕事」として、報酬を得る仕事ではなく報酬のない雇用を選ぶことにも触れるものとしてまとめることができる。これらの研究の完全版は、別に記している (Holmlund & Asaba, In manuscript; Holmlund, Guidetti, Eriksson, & Asaba, In Manuscript; Bergmark et al., 2011)。

脊髄損傷後の RTW に関わる研究は、はっきりと、トランジションの概念に焦点を当ててきたわけではない。しかし、この論文の目的のために、Crider ら (2015) の文献研究に戻り、私たちの研究結果が Crider らの文献研究で記されたことに沿っているかどうか注目してみよう。SCI の後の RTW における明らかなトランジションの側面は、生活が断絶するような出来事からの変化、つまり、障害とともにある日常生活に折り合いをつける (トランジションする) ということが含まれる。私たちの研究で見出されたことは、Crider らが作業の視点でのべたことと一致しているようだ。即ち私たちが日常生活で行うことに焦点をあてたているということである。研究の中から興味深いと思われる例をここにあげる。ある参加者は、仕事 (報酬のある雇用) に対し大きな期待を抱き、支援を受けるために長期間にわたり行政機関と雇用者と交渉をしていたが、最終的に一般的な方法で仕事に就くのを辞めようと思いついた。Crider らが理論的視点と呼ぶようなトランジションの視点から見ると、参加者が経験したことから、トランジションを逆行する負のスパイラルとして例示されるかもしれない。しかし、心理的イデオロギーの視点ではなく作業的側面からみると、その人がこれを作業従事として見つめ、その人の価値感・習慣・ルーティンに貢献するものであれば、報酬のない

雇用へのトランジションは、予想外に肯定的なトランジションとして見るができるかもしれない。

トランジションについての省察のまとめ

私は自分が関わる研究と教育から 3 つの例を挙げた。これらのプロジェクトの焦点が、明確には、そして意図的なものとしてトランジションにあるわけではなかったにもかかわらず、これらの例の全てにおいて、複雑さ、経験の多様性、環境、そして危機や挑戦に折り合いをつけるというトランジションの側面が述べられていた。これらの例は全て堅固に作業科学を基盤としているが、振り返ってみると、トランジションは積極的に「行うこと (doing)」という性質があるように見える。高齢移住者の研究プロジェクトで、私たちは高齢者の地域居住の考えに、場所作りなどの代案で挑戦している。なぜならばこの考えは、高齢移住者の私たちの理解を受動的なものから、場所を「作る」という肯定的なものへと移行させるからである。同様に、「作業について学ぶプロジェクト」や「仕事に戻るプロジェクト」では、参加者は、専門職のアイデンティティや仕事生活の可能性を、可能にしたり妨げたりするトランジションを作り出すための積極的方法について話してくれた。作業科学の共通語の中で、トランジションの概念がどう位置付くかに関してはまだ未知な部分ではあるが、作業科学の貢献の可能性は、トランジション課程における作業、そしてトランジションを通じた作業の適応にあり得る。

謝意

本論の執筆で取り上げたトピックに関し、思慮深く、かつ刺激的な討論をしてくださった世界中の私の同僚に感謝する。特に、本論の私の考えに討論を通して多くの影響を与えて下さった Margarita Mondaca 氏、Debbie Rudman 氏、Karin Johansson 氏、Melissa Park 氏、Staffan Josephsson 氏、Mark Luborsky 氏、Lena Rosenberg 氏、and Lisa Holmlund (旧姓 Bergmark) 氏に、そして、講演や本論の日本語訳に関わって下さった近藤知子氏、中村美緒氏、浅羽明恵氏に感謝したい。

本論文は、トヨタ財団 2010 研究助成、2014-2018 ニューロ財団研究助成、国立高齢研究助成 2015 からの助成を基盤に実施したプロジェクトを基盤としている。

引用文献

Asaba, E., & Wicks, A. (2010). Occupational Potential. *Journal of Occupational Science*, 17(2), 120-124.
Becker, G. (2003). Meanings of place and displacement in three groups of older immigrants. *Journal of Aging*

Studies, 17(2), 129-149.
Behar, R. (2013). *Traveling heavy: a memoir in between journeys*. Durham: Duke University Press.
Bergmark, L., & Asaba, E. (In manuscript). Focus on return to work after spinal cord injury through photovoice.
Bergmark, L., Guidetti, S., Eriksson, G., & Asaba, E. (In Manuscript). Return to work as situated in everyday life 7-11 years after spinal cord injury.
Bergmark, L., Westgren, N., & Asaba, E. (2011). Returning to work after spinal cord injury: Exploring young adults' early expectations and experience. *Disability & Rehabilitation*, 33(25-26), 2553-2558.
Blair, S. E. E. (2000). The centrality of occupation during life transitions. *British Journal of Occupational Therapy*, 63(5), 231-237.
Bozic, S. (2006). The achievement and potential of international retirement migration research: The need for disciplinary exchange. *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 32(8), 1415-1427.
Crider, C., Calder, R., Bunting, K. L., & Forwell, S. (2015). An integrative review of occupational science and theoretical literature exploring transition. *Journal of Occupational Science*, 22(3), 304-319.
Cristoforetti, A., Gennai, F., & Rodeschini, G. (2011). Home sweet home: The emotional construction of places. *Journal of Aging Studies*, 25(3), 225-232.
Cutchin, M. P., Dickie, V., & Humphrey, R. (2006). Transaction versus Interpretation, or Transaction and Interpretation? A Response to Michael Barber. *Journal of Occupational Science*, 13(1), 97-99.
Farias, L., & Asaba, E. (2013). "The Family knot" : Negotiating identities and cultural values enacted through everyday occupations of a migrant family in Sweden. *Journal of Occupational Science*. 20(1), 36-47.
Försäkringskassan. (2013). *Svar på uppdrag i regleringsbrev: Samlad redovisning avseende Utvecklat samspel mellan Försäkringskassan och hälso- och sjukvården samt andra aktörer i sjukskrivningsprocessen, Dnr 005437-2012-FPS*. Retrieved from
Hellman, T., Bergström, G., Bonnevier, H., Busch, H., & Jensen, I. (2013). *Fördjupad utvärdering av rehabiliteringsgarantin. Erfarenheter av att arbeta med multimodal rehabilitering utifrån rehabiliteringsgarantins syfte och riktlinjer – Delrapport*. Retrieved from Stockholm:
Henning, C., Ahnby, U., & Osterstrom, S. (2009). Senior

- housing in Sweden: A new concept for aging in place. *Social Work in Public Health*, 24(3), 235-254.
- Heuchemer, B., & Josephsson, S. (2006). Leaving homelessness and addiction: Narratives of an occupational transition. *Scandinavian Journal of Occupational Therapy*, 13(3), 160-169. doi:doi:10.1080/11038120500360648
- Holmlund, L., & Asaba, E. (In manuscript). Focus on return to work after spinal cord injury through photovoice.
- Holmlund, L., Guidetti, S., Eriksson, G., & Asaba, E. (In Manuscript). Return to work as situated in everyday life 7-11 years after spinal cord injury.
- Hon, C., Sun, P., Suto, M., & Forwell, S. J. (2011). Moving from China to Canada: Occupational transitions of immigrant mothers of children with special needs. *Journal of Occupational Science*, 18(3), 223-236. doi:doi:10.1080/14427591.2011.581627
- Hwang, E., Cummings, L., Sixsmith, A., & Sixsmith, J. (2011). Impacts of home modifications on aging-in-place. *Journal of Housing for the Elderly*, 25(3), 246-257.
- ILO. (2001). *ILO Report of the Director-General: Reducing the decent work deficit - a global challenge* (ISBN 92-2-111949-1). Retrieved from Geneva: <http://www.ilo.org/public/english/standards/relm/ilc/ilc89/rep-i-a.htm>
- Jackson, M. (1995). *At home in the world*. Durham: Duke University Press.
- Jackson, M. (2013). *The Wherewithal of Life: Ethics, Migration, and the Question of Well-being*. Berkeley: University of California Press.
- Johansson, K., Laliberte Rudman, D., Mondaca, M. A., Park, M., Luborsky, M., Josephsson, S., & Asaba, A. (2012). Moving beyond 'aging in place' to understand migration and aging: Place making and the centrality of occupation. *Journal of Occupational Science, iFirst*, 1-12.
- Jonsson, H., Josephsson, S., & Kielhofner, G. (2001). Narratives and experience in an occupational transition: A longitudinal study of the retirement process. *American Journal of Occupational Therapy*, 55(4), 424-432. doi:doi:10.5014/ajot.55.4.424
- Lewis, D. C. (2009). Aging out of place: Cambodian refugee elders in the United States. *Family and Consumer Sciences Research Journal*, 37(3), 376-393.
- Patterson, F. M. (2006). Policy and practice implications from the lives of aging international migrant women. *International Social Work*, 47(1), 25-37.
- Phillipsson, C. (2007). The 'elected' and the 'excluded' : sociological perspectives on the experience of place and community in old age. *Ageing & society*, 27, 321-342.
- Ricketts, T. C., & Fraher, E. P. (2013). Reconfiguring health workforce policy so that education, training, and actual delivery of care are closely connected. *Health Affairs*, 32(11), 1874-1880.
- Sutton, G., & Griffin, M. A. (2000). Transition from student to practitioner: The role of expectations, values and personality. *British Journal of Occupational Therapy*, 63(8), 380-388.
- Valtonen, K., Karlsson, A., Alaranta, H., & Viikari-Juntura, E. (2006). Work participation among persons with traumatic spinal cord injury and meningomyeloma. *Journal of Rehabilitation Medicine*, 38(3), 192-200.
- Wasiak, R., Young, A. E., Roessler, R. T., McPherson, K. M., van Poppel, M. N. M., & Anema, J. R. (2007). Measuring return to work. *Journal of Occupational Rehabilitation*, 17, 766-781.
- WFOT. (2012). *Position statement: Vocational rehabilitation*. Retrieved from Taiwan:
- Wiles, J. L., Leibing, A., Guberman, N., Reeve, J., & Allen, R. E. S. (2012). The meaning of "aging in place" to older people. *The Gerontologist*, 52(3), 357-366.
- Zemke, R. (2004). The 2004 Eleanor Clarke Slagle Lecture - Time, space, and the kaleidoscopes of occupation. *American Journal of Occupational Therapy*, 58, 608-620.

Transition: contemplations through illustrations of migration, education, and work

Asaba, Eric

Karolinska Institutet, Sweden

English Abstract

In this presentation I will aim to critically explore transition, drawing on literature within occupational science as well as three empirical research projects conducted in different contexts and with different perspectives. In the first illustration, I draw on a study about international mobility and placemaking among older adults. In the second illustration, I draw on a study about learning occupation among undergraduate occupational therapy students. Finally, I draw on a study about return to work after disability. I will use the idea of transition in exploring these studies. Transitions can be about how people grow into and assume professional identities through the acquisition of knowledge that changes perspectives. Transitions can also be about disenfranchisement and disruption of identities rooted in experiences of anticipation not met. Contemplations will be discussed.

Japanese Journal of Occupational Science, 10, 24-40, 2016.

Introduction

This manuscript has been modified from the keynote lecture for the purpose of clarity in its written form. However, the content of the manuscript is in keeping with what was presented during the 2015 Tsuyoshi Sato Memorial Lecture at the 19th conference held by the Japanese Society for the Study of Occupation (JSSO) in Hamamatsu. Again, thank you for entrusting me with the honor of sharing these ideas with you. I feel humbled and at the same time proud to be part of a tradition and the development of ideas that have emerged during the past 12 years within the context of this series of memorial lectures.

There are many scholars with a background in occupational science who have engaged theoretically and practically with the concept of transition (Blair, 2000; Crider, Calder, Bunting, & Forwell, 2015; Heuchemer & Josephsson, 2006; Hon, Sun, Suto, & Forwell, 2011; Jonsson, Josephsson, & Kielhofner, 2001). Crider et al (2015) recently reviewed literature focusing on transition with a particular interest in looking at an occupational perspective. One can, from their conclusions, assert that there appears to be a sufficient base

of studies that can be used as a departure point in developing theories of transition from an occupational perspective. Crider et al leave the reader with some suggestions for future research in this area, i.e. methodological development and studies focusing on transition in relation to environment or ethnic/cultural diversity, as well as conceptual development. In the following paper I will draw on three illustrations in order to explore transition.

Point of departure - Migration

Migration is by definition about people moving from one place to another. People are today travelling more than ever. People are also experiencing migration more than ever before, partly by own experiences of emigration/immigration and partly by seeing their neighborhood transformed as people move in and out of the area. In tandem with these trends, there are a growing number of people who are growing older and who have experienced migration, either locally or internationally. These various transitions in and out of place require continuous sense making and reconnections with familiar

and unfamiliar places in everyday life (Farias and Asaba, 2013; Johansson et al., 2012; Phillipsson, 2007).

In tandem with increasing migration trends there have also been a movement to support older people in their homes for as long as possible. Aging in place has been held as a policy ideal and refers to an ambition to support people in their homes and neighborhoods for as long as possible as they grow older (Wiles, 2012). To be clear, migration trends and the emergence of ideas around aging in place have not to my knowledge had any explicit connections. The need to explicitly raise issues of working for continuity and supporting older persons in their home can perhaps be traced back to changes in working life for families. Whereas older persons were to a greater extent cared for by family members several decades ago, as of recent decades it has been more common to develop nursing facilities to which older persons are moved from their home. The development of nursing facilities emerged from a need to organize specialized nursing and rehabilitation services in one place. The aging in place ideal might in many ways be positive, however what does aging in place mean for older immigrants who are aging in another place? Moreover, a move, whether it is from one's home to a nursing home, or from one country to another, it in different ways involves transitions.

Let me draw from the words of an anthropologist and writer. "I love to travel. But I'm also terrified of travelling. As I embark on yet another trip, I carefully enact my various good luck rituals ..." (Behar, 2013, p. 3). This text is taken from *Travling Heavy: a memoir in between journeys*, and I use this for two reasons. First, I think that Behar identifies something that is relevant when considering transition, because the change element that is inherent in transition, can come with a mixed sense of love and fear ... in the same way that Behar describes her own migration experiences as a journey of both excitement (love) and fear (being terrified). Migration in itself is the other reason for why I begin with a quote from Behar. Behar in my opinion is a brilliant writer who challenges her reader to think about such things as migration with all its layers of meaning. I have an interest in understanding migration experiences from an occupational perspective, and in part of my research I have worked with persons who

have migrated (emigrated / immigrated). If for a moment we can agree that the experience of migration involves transition; in a broad sense it involves change. At the very least it involves a change in dwelling from one place to another, in other words leaving and rebuilding a place to call home.

Concepts such as home and place become relevant in the context of migration. In a colloquial sense, home is often associated with a particular place to which one returns. However, in considering migration experiences a less static sense of home might be replaced with the relevance of a more flexible understanding of home as something in flux. Jackson (1995) poses the question, is home the place where we live, or is it a place in our imagination (or dreaming as Jackson put it)? What I find interesting, which is relevant also today, is the question about the necessity for continuity and a physical place when considering what we refer to as home. Jackson (1995) writes,

"There is no point insisting upon strict continuity over time. Better to avoid mention of the way allegiances shift. Better to forget defunct identities. If there is a discrepancy between the place you hail from and the place you make your home, better not to make an issue of it" (p. 35).

This is interesting from the perspective of international migration and the gerontological concept of aging in place, because inherent in thinking critically about aging in place, the question about whether continuity and a physical place is of relevance needs to be given consideration. It is in this way that I question the relevance of the concept aging-in-place in relation to experiences among older migrants. In gerontology the concept of aging in place is often associated with what society should strive for and home in this connotes something positive.

However, this sentiment has been challenged, even though home can be a place imbued with comfort, it can also be a space of tension or terror and not simply a harmonious space. International migration involves a complex re-negotiation of place, occupation, and identity to a greater extent than migration within one's country. This is because it often involves dealing with different customs and languages, altered beliefs regarding ageing and the roles of ageing people in society, changed access to welfare and

social resources, transnational relationships, and new forms of mixed or transnational identities (Bozic, 2006; Jackson, 2013; Lewis, 2009; Patterson, 2006).

Relevance for occupational science

Exploring migration is relevant for occupational science in order to understand how people, in global contexts, relate and connect to different places around the world through daily occupations. The occupational science literature supports the need to incorporate a dynamic conceptualization of place in the study of migration, i.e. placemaking rather than aging in place (Johansson et al, 2012). Perhaps something Ruth Zemke would have (2004) referred to as issues of “occupatio-spaciality” (p. 612). Transitions would appear to be a natural conceptual link within discourses of placemaking to greater extent than perhaps aging in place. This is relevant because the continuity of place that imbues an aging in place idea might simply not resonate on similar terms for those who have experienced migration (Henning, Ahnby, & Osterstrom, 2009; Hwang, Cummings, Sixsmith, & Sixsmith, 2011; Wiles, Leibing, Guberman, Reeve, & Allen, 2012) (Cristoforetti, Gennai, & Rodeschini, 2011; Cutchin, Dickie, & Humphrey, 2006).

Learning about occupation through occupation

The next example has to do with learning about occupation through occupation. I draw from an example from the undergraduate occupational therapy curriculum at Karolinska Institutet. The course within the curriculum from which I draw is called, Foundations in Occupational Science and Occupational Therapy. It is a course that I have redesigned together with other faculty members over a 4-year period. The central question in this case has to do with the following how do students become experts in occupation and how do students make the transition from being “unknowing” to “knowing” about occupation?

I am of the opinion that these are questions that academic and clinical faculty within occupational science and occupational therapy programs must discuss. Discussing how we can address these questions will have greatest potential if the departure points are clearly grounded in an understanding of why this is important. Understanding the architecture and mechanisms of occupation is part of the

key to potentiality in everyday life (Asaba & Wicks, 2010). We need to assure that our students leave our programs with a sufficient understanding about what occupation is - which usually also means facilitating a transition into professional identities as occupational therapist and/or occupational scientist. Transitions in this case are dependent on applications of knowledge acquisition, in other words becoming more knowledgeable about occupation, being able to reflect upon the evolving knowledge about occupation, and being able to apply the knowledge in different contexts. I believe that this is important in order to continue learning about occupation and to use occupation in clinical, research, or leadership practices.

Occupation has been explored in learning contexts from various perspectives (Sutton & Griffin, 2000). However, the use of occupation within education to facilitate learning about occupation is rare. The aim of this educational project was to develop a learning activity based on occupation through which to learn occupation, and to explore student experiences about learning occupation through occupation. There was an explicit intention in this project to build the course on values and concepts from occupational science as well as pedagogy.

Let us consider what learning looks like. Traditionally, and in some university contexts today, learning contexts could be characterized with an illustration of a teacher at the front of a classroom and students sitting in rows increasingly more removed from the front where the teacher is standing. Over time the illustration transforms from one with many students during the first week of class, to one where few students prioritize coming to class. The illustration represents a context where students don't find that their presence or participation in the classroom situation contributes to their learning. If we add to this an idea about examination. The traditional lecture context is often concluded with a sit-down written examination where the student should demonstrate that they can answer a set of questions. To be clear, I do not mean that the so called traditional learning context necessarily is ineffective. What I mean is that this particular method might not be most appropriate when learning occupation, without also having experiential learning methods. Based on ideas such as

flipped classrooms, online learning, peer feedback, and active learning, the course design here makes learning an active process where students need to experience occupation, seek information to support their emerging ideas about what occupation is, and share ideas with each other in order to deepen knowledge in a cyclical way.

The learning activity

The learning activity was structured as follows students were given the task to choose an occupation that they wanted to do, but had never done or at least not done for a few years. The occupation that students chose needed to be something that they felt would be feasible to carry out at least 2x/week during the course. Students were also assigned into project groups consisting of about 8 students per group. The project groups served as a smaller forum in which students met to discuss ideas, class assignments, or readings. The project group also had access to a closed blog through which to communicate. During the first week of the course, students choose an occupation, conducted an activity analysis of the occupation, wrote a blog about why they chose the occupation and what they anticipated. During the following weeks students blogged 1x/week. Each blog included a) a reflection about that week's experiences related to the occupation, and b) a reflection about the readings from that week in relation to the occupation. Each student provided feedback on another student's blog. Readings included the Model of Human Occupation as well as selected other readings from journals such as the journal of occupational science. Each week there were short trigger lectures, supervision meetings, and seminars given by different faculty members in order to provide inspiration for the readings and in order to have discussions with experienced faculty.

Finally, in order to provide students with a feeling that there would be a real audience with which to share their experiences as well as to bridge different student groups, a vernissage was planned for the last day. The vernissage was an opportunity to invite students from other programs or years, as well as faculty and staff from campus. In preparation for the vernissage, students planned a theme for the vernissage, created an invitation, and used visual and storied techniques to organize the event so that the audience could see the result of or try occupations that the students had engaged in during the course.

Method

In order to evaluate the new course development 3 aspects were identified. We reasoned that it would be of relevance to interview students about their experiences. Second we thought that it would be of relevance to look at the cost of the new course design in relation to the original course. Finally we wanted to look at student grades to see if there were any changes in this aspect between the new and original course.

Findings

Student experiences

Three focus groups were conducted to evaluate student experiences. Focus groups were conducted during 3 different semesters with different students. A total of 12 students participated in the focus groups. Four themes were identified. 1) it was a lot more than I expected, 2) I have begun to think in other ways, 3) getting to do something on one's own, and 4) receiving feedback was nice.

The first theme had to do with a realization rooted in actually struggling with a new occupation. Students chose occupations such as jogging, yoga, playing an instrument, cooking, cycling, among more. Students for the most part anticipated no difficulties, except for perhaps finding time. However, once they began performing the occupations they realized that it often included more challenges than just finding time. One participant summarizes the point well:

“Well one got more insight about occupation and that it is a lot more encompassing than one thought, to engage in a totally new occupation. It isn't always so easy.”

Students also agreed that integrating the doing of the occupation with theoretical readings contributed to learning. Moreover students felt that it would have been difficult to gain the same level of understanding without their own experience of doing the occupation.

The second theme had to do with thinking differently. Students felt that the experience of changing a routine meant that they had a heightened awareness of the good and bad about the routine. Moreover, students felt that they at times began to analyze friends and family in terms of their balance and repertoire of occupations as a result of doing a self-analysis. The third theme relates to the second in a

way, but had to do with that students felt engaged in a problem-solution spectrum by needing to actively engage in a new occupation. This was seen as something positive although students felt that it was a lot of work.

Finally, the fourth theme had to do with the experience of feedback. Students felt that the blogg was difficult to use and that it came with several technical challenges, however the weekly feedback that came with the blogging was seen as an asset in the course.

Cost of course and grades

A critique that often is discussed with redesigning a course is that it will be too costly or alternatively not receive enough funding. Therefore we looked at the cost of the course based on faculty hours. This can be done in different ways but in this case a model with hours in class multiplied by preparation time was used (se table 1).

Table 1.

Course activity	Hours	Preparation time (factor)
Lecture	1	3-5
Seminar	1	1-2
Workshop	1	1
Examination	1	1

To exemplify the model, consider the following. In this illustration prepatation time is called a factor. If a faculty member has a 3-hour lecture, which is held by the same person each semester, it generates a time cost of 3 (lecture) x 3 (factor), 9 hours. Within this 3 hour period there is a 15 minute break. If the faculty member is new, there is often an extra factor, i.e. 3 (lecture) x 5 (factor), 15 hours. When there are many lectures, there are also usually examinations, that can generate 40-50 hours of correction time for faculty. By changing an educational philosophy, lectures decrease and other forms for learning are prioritized. For instance, 1 hour seminar is 1 (seminar) x 2 (factor), 2 hours. This means that we could have 4 smaller seminar groups with students and faculty to discuss ideas and readings and still have 1 hour less course budget time as compared to a 3-hour lecture.

If we look at table 2, the number of faculty led course hours have been reduced dramatically. This has been seen as positive because although it takes the teacher 1 extra hour

of live time with students, as compared to a 3-hour lecture, it tends to give a more effective result and students appear to remember information for longer as well as be more satisfied with a course, when they have been active through seminars. This is something that is not captured in a grade.

Table 2.

Academic year	# of students	Cost in hours (mean)	Grade (# of students)		
			Honors	Pass	Fail
2010/2011	86	530	-	75	11
2012/2013	82	428	26	52	4
2014/2015	89	410	31	50	8

Relevance for occupational science

In summary, I believe that active participation in learning activitites where occupation is in focus and where occupation is part of experience-based learning early in an occupational therapy or occupational science educational curriculum, can lead to a deeper understanding about occupation by giving students a living conceptual framework in which to test ideas. This is important, and relevant in terms of transitions, because transitioning into professional identities as occupational therapist/scientist rests on a solid understanding of the disciplines core. The results from this case are far from complete, but I believe that it provides an indication that this type of experience-based learning of occupation early in the curriculum contributes to the early phases of transitioning into professional identities as occupational therapist. Furthermore, more and different kinds of learning activities does not neccessarily mean that it ultimately requires more time. Finally, feedback is important and I believe that it is not only for students where feedback about occupation is important, it is also important for the people that occupational therapists meet in therapeutic situations. I believe that this is something of relevance for educators to continue discussing and revising.

Return To Work (RTW) after spinal cord injury

The final illustration is grounded in ongoing work having to do with return to work after disability. I am part of a group of researchers and doctoral students working with projects that in one way or another relate to vocational rehabilitation or return to work, and it is on this work upon which I draw here.

Consider a few points of trivia. A young person entering the job market today will likely change career a few times during the working lifetime. Ten years from now, graduates from today will be working in jobs that don't yet exist today. This means that young people entering the job market today are likely to make major transitions in terms of work and in fact, some of the transitions involve futures that have not yet been named. Let us stake a step back and consider what work entails. Put simply, I would argue that "work" is a type of occupation, and it can therefore be relevant for occupational science. Moreover, work, from an occupational perspective is more than just paid employment. This is in agreement with other definitions such as the international labor organization, which describes work as involving more than mere paid employment. They write,

Every day we are reminded that, for everybody, work is a defining feature of human existence. It is the means of sustaining life and of meeting basic needs. But it is also the activity through which individuals affirm their own identity, both to themselves and to those around them. It is crucial to individual choice, to the welfare of families and to the stability of societies (ILO, 2001, p. 1.2).

Furthermore, in clinical practice imbued with an occupational perspective work is of relevance. The world federation of occupational therapists (WFOT) asserts in a position paper on vocational rehabilitation that,

In this statement vocational rehabilitation refers broadly to the provision of various services to assist people to enter, re-enter, return to and/or remain in work. Around the world vocational rehabilitation is available to varying degrees and in various forms, for the public and private sectors and within non-governmental organisations for people with and without a work history, and for employees and employers in diverse professional and non-professional fields (WFOT, 2012, p. 1).

To summarize the framework for this study, my point here is that work is a type of occupation and that it encompasses more than paid employment. Remuneration is however a vital aspect of work for most adults and understanding

processes where work is no longer possible or where people need to return to work is of critical importance.

Persons with spinal cord injury in Sweden constitute a relatively small group of people, but who can greatly benefit from innovations in vocational rehabilitation practices aimed at supporting return to work (RTW). It has been reported that approximately 50% of persons with a new SCI do not work post-injury (Valtonen, Karlsson, Alaranta, & Viikari-Juntura, 2006). Being able to work is an important personal goal for most adults in working age, and research has shown this to also be true among young adults with spinal cord injury early in a rehabilitation process (Bergmark, Westgren, & Asaba, 2011). The concept of RTW is broad and can mean returning to a workplace, but can also include beginning at a new workplace or taking on a different worker role (Wasiak et al., 2007). Return to work in this group is important because national guidelines do not exist and there is a lack of knowledge about how to organize resources to support RTW (Hellman, Bergström, Bonnevier, Busch, & Jensen, 2013). The importance of having a holistic view regarding return to work has been underlined by government agencies such as the Social Insurance Office, which calls for increased collaboration between different stakeholders to make vocational rehabilitation more effective for the person needing support after injury, disease, or illness (Försäkringskassan, 2013; Ricketts & Fraher, 2013).

In the RTW project I am drawing on two sets of data. One set of data is based on individual interviews with adults living with SCI. These interviews were carried out with 8 adults who were 1 to 5 years post-injury. The same group was individually followed up and interviewed 6 years later including participant observations. All of this data gathering has been completed by Lisa Holmlund (previously Bergmark) who is a doctoral student working with me. The other set of data has been generated through photovoice sessions with a group of 6 persons with SCI. These individuals were not included in the individual interviews in the first two studies. Lisa and I have conducted the photovoice groups consisting of 8 sessions plus 3 additional sessions with a reference group to plan an exhibition (Holmlund & Asaba, in manuscript).

The results from our studies collectively address experiences relating to expectations for work, looking at what actually happened, and exploring situations where it worked. The results can perhaps be summarized as touching upon a continuous negotiation of priorities in everyday life, a need to integrate education into the RTW process, a degree of uncertainty in experiencing moving between hope and despair in relation to work, and finally at times also choosing non-paid employment as meaningful “work” over paid work. A complete report of these studies can be found elsewhere (Holmlund & Asaba, in manuscript; Holmlund, Guidetti, Eriksson, & Asaba, in Manuscript; Bergmark et al., 2011).

Our research on RTW after SCI does not have an explicit focus on the concept of transitions. However for the purpose of this paper it is interesting to return to the literature review by Crider et al (2015) and look at how the results from our studies are in agreement or not, with the literature review presented by Crider et al. The immediately apparent aspects of transition that inform RTW after SCI include the changes from a life disrupting event, i.e. coming to terms with (transitioning) an everyday life with disability. In our studies the findings would seem to be in agreement with what Crider et al put forth in terms of an occupational perspective, namely that we focused on the doing in everyday life. An example from one of the studies that can be of interest here. One participant who had high expectations for work (paid employment) and who had during an extended period of time struggled with government agencies and employers to receive support, finally decided to stop pursuing work via regular channels. From a transition perspective grounded in what Crider et al call the theoretical perspective, the participants journey might exemplify a negative spiral of making counterproductive transitions. However, from an occupational perspective the lens is shifted from the psychological ideologies, and where a transition to unpaid employment might unexpectedly be seen as a positive transition if this contributes to values, habits, and routines in line with what the person sees as engaging occupation.

Concluding reflections about transition

I have put forth three illustrations from my work in research and education. In all of these illustrations, aspects of

transition such as: complexity, diversity of experience, environment, and coming to terms with a crisis or challenge have been pronounced even though the focus of these projects were not explicitly or intentionally on transition. As I reflect on these examples, which are all firmly rooted in occupational science, I can see that transitions are characterized by a proactive doing. In the research project with older migrants, we challenge aging in place with an alternative such as placemaking because it shifts our understanding of the older migrant from passive to active in “making” place. Similarly in the “learning about occupation project” and the “return to work project,” participants shared stories of active strategies that allowed them to make transitions that enabled or hindered their professional identities and possibilities for working life. What place the concept of transition will have in the lingua franca of occupational science remains to be seen, but I think that the contribution from occupational science can be in the application of occupation on, and through, transition.

Acknowledgements

I would like to express gratitude to all my colleagues around the world for thoughtful and stimulating discussions concerning topics taken up in this paper. An extra thank you to Margarita Mondaca, Debbie Rudman, Karin Johansson, Melissa Park, Staffan Josephsson, Mark Luborsky, Lena Rosenberg, and Lisa Holmlund (previously Bergmark) for discussions that have informed my thinking in this paper, and to Tomoko Kondo, Mio Nakamura, and Akie Asaba for translation relating to the talk and this paper. This article is based on projects made possible with funding from The Toyota Foundation 2010 Research Grant, 2014-2018 National Research School Grant in Healthcare Sciences, Norrbacka Eugenia Foundation Research Grants 2013-2018, Neuro Foundation Research Grant 2015, and National Foundation for Aging Research Grant 2015.

References

- Asaba, E., & Wicks, A. (2010). Occupational Potential. *Journal of Occupational Science, 17*(2), 120-124.
- Becker, G. (2003). Meanings of place and displacement in three groups of older immigrants. *Journal of Aging Studies, 17*(2), 129-149.
- Behar, R. (2013). *Traveling heavy: a memoir in between journeys*. Durham: Duke University Press.

- Bergmark, L., Westgren, N., & Asaba, E. (2011). Returning to work after spinal cord injury: Exploring young adults' early expectations and experience. *Disability & Rehabilitation, 33*(25-26), 2553-2558.
- Blair, S. E. E. (2000). The centrality of occupation during life transitions. *British Journal of Occupational Therapy, 63*(5), 231-237.
- Bozic, S. (2006). The achievement and potential of international retirement migration research: The need for disciplinary exchange. *Journal of Ethnic and Migration Studies, 32* (8), 1415-1427.
- Crider, C., Calder, R., Bunting, K. L., & Forwell, S. (2015). An integrative review of occupational science and theoretical literature exploring transition. *Journal of Occupational Science, 22*(3), 304-319.
- Cristoforetti, A., Gennai, F., & Rodeschini, G. (2011). Home sweet home: The emotional construction of places. *Journal of Aging Studies, 25*(3), 225-232.
- Cutchin, M. P., Dickie, V., & Humphrey, R. (2006). Transaction versus Interpretation, or Transaction and Interpretation? A Response to Michael Barber. *Journal of Occupational Science, 13*(1), 97-99.
- Farias, L., & Asaba, E. (2013). "The Family knot" : Negotiating identities and cultural values enacted through everyday occupations of a migrant family in Sweden. *Journal of Occupational Science, 20*(1), 36-47.
- Försäkringskassan. (2013). *Svar på uppdrag i regleringsbrev: Samlad redovisning avseende Utvecklat samspel mellan Försäkringskassan och hälso- och sjukvården samt andra aktörer i sjukskrivningsprocessen, Dnr 005437-2012-FPS*. Retrieved from
- Hellman, T., Bergström, G., Bonnevier, H., Busch, H., & Jensen, I. (2013). *Fördjupad utvärdering av rehabiliteringsgarantin. Erfarenheter av att arbeta med multimodal rehabilitering utifrån rehabiliteringsgarantins syfte och riktlinjer - Delrapport*. Retrieved from Stockholm:
- Henning, C., Ahnby, U., & Osterstrom, S. (2009). Senior housing in Sweden: A new concept for aging in place. *Social Work in Public Health, 24*(3), 235-254.
- Heuchemer, B., & Josephsson, S. (2006). Leaving homelessness and addiction: Narratives of an occupational transition. *Scandinavian Journal of Occupational Therapy, 13*(3), 160-169. doi:doi:10.1080/11038120500360648
- Holmlund, L., & Asaba, E. (In manuscript). Focus on return to work after spinal cord injury through photovoice.
- Holmlund, L., Guidetti, S., Eriksson, G., & Asaba, E. (In Manuscript). Return to work as situated in everyday life 7-11 years after spinal cord injury.
- Hon, C., Sun, P., Suto, M., & Forwell, S. J. (2011). Moving from China to Canada: Occupational transitions of immigrant mothers of children with special needs. *Journal of Occupational Science, 18*(3), 223-236. doi:doi:10.1080/14427591.2011.581627
- Hwang, E., Cummings, L., Sixsmith, A., & Sixsmith, J. (2011). Impacts of home modifications on aging-in-place. *Journal of Housing for the Elderly, 25*(3), 246-257.
- ILO. (2001). *ILO Report of the Director-General: Reducing the decent work deficit - a global challenge* (ISBN 92-2-111949-1). Retrieved from Geneva: <http://www.ilo.org/public/english/standards/relm/ilc/ilc89/rep-i-a.htm>
- Jackson, M. (1995). *At home in the world*. Durham: Duke University Press.
- Jackson, M. (2013). *The Wherewithal of Life: Ethics, Migration, and the Question of Well-being*. Berkeley: University of California Press.
- Johansson, K., Laliberte Rudman, D., Mondaca, M. A., Park, M., Luborsky, M., Josephsson, S., & Asaba, A. (2012). Moving beyond 'aging in place' to understand migration and aging: Place making and the centrality of occupation. *Journal of Occupational Science, iFirst*, 1-12.
- Jonsson, H., Josephsson, S., & Kielhofner, G. (2001). Narratives and experience in an occupational transition: A longitudinal study of the retirement process. *American Journal of Occupational Therapy, 55*(4), 424-432. doi:doi:10.5014/ajot.55.4.424
- Lewis, D. C. (2009). Aging out of place: Cambodian refugee elders in the United States. *Family and Consumer Sciences Research Journal, 37*(3), 376-393.
- Patterson, F. M. (2006). Policy and practice implications from the lives of aging international migrant women. *International Social Work, 47*(1), 25-37.
- Phillipsson, C. (2007). The 'elected' and the 'excluded' : sociological perspectives on the experience of place and community in old age. *Ageing & society, 27*, 321-342.
- Ricketts, T. C., & Fraher, E. P. (2013). Reconfiguring health workforce policy so that education, training, and actual delivery of care are closely connected. *Health Affairs, 32*(11), 1874-1880.
- Sutton, G., & Griffin, M. A. (2000). Transition from student to practitioner: The role of expectations, values and

- personality. *British Journal of Occupational Therapy*, 63(8), 380-388.
- Valtonen, K., Karlsson, A., Alaranta, H., & Viikari-Juntura, E. (2006). Work participation among persons with traumatic spinal cord injury and meningomyeloma. *Journal of Rehabilitation Medicine*, 38(3), 192-200.
- Wasiak, R., Young, A. E., Roessler, R. T., McPherson, K. M., van Poppel, M. N. M., & Anema, J. R. (2007). Measuring return to work. *Journal of Occupational Rehabilitation*, 17, 766-781.
- WFOT. (2012). *Position statement: Vocational rehabilitation*. Retrieved from Taiwan:
- Wiles, J. L., Leibing, A., Guberman, N., Reeve, J., & Allen, R. E. S. (2012). The meaning of "aging in place" to older people. *The Gerontologist*, 52(3), 357-366.
- Zemke, R. (2004). The 2004 Eleanor Clarke Slagle Lecture - Time, space, and the kaleidoscopes of occupation. *American Journal of Occupational Therapy*, 58, 608-620.